主イエスと弟子たち

2008. 04. 08 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

マルコの福音書 4章35節から41節

さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、「さあ、向こう岸へ渡ろう。」と言われた。そこで弟子たちは、群衆をあとに残し、舟に乗っておられるままで、イエスをお連れした。他の舟もイエスについて行った。すると、激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水でいっぱいになった。ところがイエスだけは、ともものほうで、枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして言った。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われませんか。」イエスは起き上がって、風をしっかりと、湖に「黙れ、静まれ。」と言われた。すると風はやみ、大なぎになった。イエスは彼らに言われた。「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことですか。」彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った。「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。

今読んでいただきました箇所のために一つの題名をつけようと思うなら、『主イエスと弟子たち』とつけることができるのではないかと思います。

もちろんイエス様と弟子たちとは全く違います。私たちがイエス様をよりよく知るようになればなるほど、私たちは自分自身についてもより深く知ることができるようになります。私たちがイエス様を大切に思うようになればなるほど、私たちにとって自分のことが大切ではなくなります。私たちが主に対して祈れば祈るほど、私たちは自分自身に対して信頼を置くことができなくなってしまうのではないのでしょうか。

私たちが困難に直面するならば、そのことが「主を見い出すため」のきっかけとなるべきです。けれど実際問題として、私たちが苦境に陥ってどうしようもない状態になった時、つまりその時こそイエス様を必要とするのに、私たちは主のことを思わずにいたり、主に頼り頼むことを忘れていたりするものなのではないのでしょうか。

私たちは、イエス様が全能の方であり、また愛の方であるということをももちろん確信していますが、私たちはその確信が現実には自分自身の力となっているかどうか。私たちは、波が静まって凪いでいる際にイエス様の全能と愛を確信していることと、私たちが荒れた海の上にいる時（つまり試練の時）に、主イエス様の「全能のみ力」と「愛」を確信していることとは大きな隔たりがあります。

イエス様は、昨日も今日もいつまでも変わらないお方です。イエス様は、嵐の時も嵐の時も、私たちが健康の時も病気の時も、また、富んでいる時も貧しい時も、気分のよい時もそうでない時も、変わりのないお方です。イエス様は、私たちが現実に絶対的な信頼を置くことができるお方です。私たちはいつでも、何があっても、このゆるがない主に信頼することができます。この素晴らしい主を自分のものにすることは大きな幸いです。

イエス様の態度と弟子たちの態度には大きな違いがあります。今読んでいただきました箇所を見るとわかります。イエス様と弟子たちのとった態度は、

・第一に、苦難に対して。

弟子の態度、弟子の特徴とは、不安、不信仰、絶望でした。イエス様の特徴とは、まったく平安でした。

・第二に、お互いに対して、

つまりイエス様は弟子たちにどのような態度をとられたか、また弟子たちはイエス様にどのような態度をとったかということです。

イエス様に対する弟子の態度はどういうものであったかと言いますと、不信頼、また愚かさでした。弟子に対するイエス様のとられた態度の特徴は、恵みと寛容でした。

苦難はその人の心の状態を明らかにします。イエス様と弟子たちは同じ一つの舟の中にいて、同じように波にもてあそばされ全く同じ境遇に置かれていました。しかし、その苦難に対してとられた態度は全く違っていました。

弟子たちは、恐れに満たされ、どうしたらよいかわからない状態であり、絶望していました。その原因は彼らの不信仰と不信頼にあったのです。イエス様は、それとは全く対照的に、舟の中で枕して眠っておられました。つまり父なる神のみ腕に安らいでおられたのです。イエス様の心は、その波と嵐を超越しておられました。

弟子たちは漁師であり、このような嵐にはむしろ慣れていたことと思います。しかし、この場合には、彼らの直面していた嵐は非常に激しく、船が沈んでしまいそうな危険がありました。彼らは物ごとを大げさに話す人たちではなかったのです。彼らは、自分たちがすぐに波にのまれて、死んでしまうと考えたのです。これらのことは、人間的に考えれば正しいことであるかもしれませんが、不信仰の現われにほかなりませんでした。

初代教会の兄弟姉妹のとった態度は、次のようなものです。

コリント人への手紙・第二 4章18節前半

私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。

この態度をとると、希望がわいてきます。安心して全てを主に委ねることができます。結局、「私たちは見えるものではなく、見えないものにこそ目を留める」、これこそ「信仰」です。それならば不信仰とは何でしょう。「私たちは見えないものではなく、見えるも

のにこそ目を留める」ということになります。

弟子たちは、単に目に見える現実を目を奪われていたのです。波は現実のものであり、また風も現実でした。それらは夢でもなく、単なる想像でもなかったのです。しかし弟子たちは、この目に見える現実を、信仰によって克服することができなかつたのです。彼らは、目に見えるものを克服することができなかつたので、不信仰とみなされました。

私たちが靈的に弱くなったり、過ちを犯したりすることの原因は、不信仰にあります。私たちはしばしば、次のような不信仰の状態に陥るのではないのでしょうか。

つまり、私たちは「信頼すべき時」に心の中に混乱が起こり、「主に頼るべき時」に自分の思いでいろいろな逃れ道を考え、「主に対してだけ目を注ぐべき時」にほかの人間の助けを求めたりするようなことがあるのではないのでしょうか。

これが「罪」なのです。このような状態では、私たちは主にご栄光を帰することができません。このような状態では、ほかの人をイエス様のみもとに導くこともできません。私たちが主に対する自分自身の不信頼について考える時、私たちは主の前に赤面せざるを得ません。困難に直面した時、もし私たちがその困難に対して正しい態度をとることができないならば、私たちは主に対しても正しい態度をとることができないのです。これら二つの事からは、お互いに密接な関係を持った不測、不備の事からです。

嵐に遭う前の態度は、外側から見た限りにおいて、イエス様と弟子たちとの間にそれほど大きな違いは見られなかつたでしょう。一日のみわざを終えて、イエス様はほかの人間と全く同じようにぐったりと疲れ果てておられました。しかし、彼らが苦難に直面することによって（ここでは苦難とは嵐のことですが）、イエス様と弟子たちの態度は全く違ったものになったのです。弟子たちは嵐のための対処に大わらわでした。彼らはすぐに帆をたたんだり、舟にたまった水をかき出したり、舳先を波の押し寄せてくる方向へ向けるために一生懸命だったことでしょう。こうしなければ舟がたちどころに波をかぶって沈没してしまうと思ったためでしょう。

しかし、イエス様はそのような時にあっても安らかに眠っておられたのです。弟子たちは不安に満たされていましたが、イエス様は平安そのものでした。弟子たちは自分が死ぬかもしれないとおびえていましたが、イエス様は彼らがこのことによって決していのちを失うことがないことを知っておられたのです。弟子たちは黒雲を見上げ、押し寄せてくる波を見つめ、また木の葉のように波にもてあそばれる舟を見て、「自分たちは溺れて死ぬに違いない」と思ったのです。

しかしイエス様は波をご覧にならずに、天におられるみ父をご覧になったのです。イエス様は、詩篇の作者と同じ確信を持っておられたのではないかと思います。詩篇の作者は次のように書いたのです。

詩篇 93篇4節

大水のとどろきにまさり、海の力強い波にもまさって、いと高き所にいます主は、

力強くあられます。

弟子たちのとった態度は、今話しましたように不信仰の結果でした。不信仰とはイエス様に対する不信頼の態度です。不信頼は常に愛する者の心を悲しませます。

その一例を、創世記の50章に見ることができます。ヨセフの物語です。15節から読みます。

創世記 50章15節から21節

ヨセフの兄弟たちが、彼らの父が死んだのを見たとき、彼らは、「ヨセフはわれわれを恨んで、われわれが彼に犯したすべての悪の仕返しをするかもしれない。」と言った。そこで彼らはことづけしてヨセフに言った。「あなたの父は死ぬ前に命じて言われました。『ヨセフにこう言いなさい。あなたの兄弟たちは実に、あなたに悪いことをしたが、どうか、あなたの兄弟たちのそむきと彼らの罪を赦してやりなさい、と。』今、どうか、あなたの父の神のしもべたちのそむきを赦してください。」ヨセフは彼らのこのことばを聞いて泣いた。彼の兄弟たちも来て、彼の前にひれ伏して言った。「私たちはあなたの奴隷です。」ヨセフは彼らに言った。「恐れることはありません。どうして、私が神の代わりでしょうか。あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。ですから、もう恐れることはありません。私は、あなたがたや、あなたがたの子どもたちを養いましょう。」こうして彼は彼らを慰め、優しく語りかけた。

「ヨセフは彼らのこのことばを聞いて泣いた」。喜んだのではなく、「泣いた」のです。

このヨセフは、彼の兄たちが彼に対して犯した事がらをすべて赦し、長い間彼らのために心配していました。ヨセフの兄たちは、父ヤコブが死んだ時に不安に陥ったのです。弟のヨセフは自分たちに対して復讐するのではないかと思いました。何十年もの間、ヨセフはその兄たちに対して愛を示してきました。しかし、ヨセフは兄たちから不信頼の態度を示されたのです。その結果、ヨセフはこのことを聞いたときに「泣いた」というかたちで表われました。

このような不安は根拠のないものであり、また不当なものであり、愚かなものでした。根拠のないこのような愚かな不安の例を、私たちは聖書を通していくつも指摘することができるのです。

例えばペテロという男は、波を渡ってイエス様の近くに行きたいと思いました。イエス様はそれに対して、「いいよ、ペテロ。来なさい」とおっしゃいました。そして彼は確かに水の上を歩いたのです。何メートルだったか何十メートルだったかわかりませんが。しかし、彼は不安になって沈みかけてしまった。イエス様から目をそらしたからです。

マタイの福音書 14章30節

ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください。」と言った。

「風を見て、こわくなり…」。イエス様を見て、ではありません。

イエス様に従っていくならば、私たちはどのような状況に陥るとも、不安を持つ必要は全くありません。弟子たちはこのとき、弟子たちだけで舟の中にいたわけではありません。イエス様も共におられました。弟子たちはイエス様と行動を共にしていましたので、イエス様の全能のみ力を、またイエス様の愛を何度となく体験して知っていたのです。

マルコの福音書 4章38節

ところがイエスだけは、とものほうで、枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして言った。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われないのですか。」

このような不安は全く根拠のないものでした。

マルコ伝5章の中に、12年間病気を患っていた女性の記事があります。彼女はイエス様によってたちどころにその病を癒されました。その女性は、「イエス様の着物にでも触れば癒されるのだが…」と考えたからです。

マルコの福音書 5章33節

女は恐れおののき、自分の身に起こった事を知り、イエスの前に出てひれ伏し、イエスに真実を余すところなく打ち明けた。

主はそのような人々を捜し求めておられるのではないのでしょうか。「イエス様の前に出てひれ伏し、イエスに真実を余すところなく打ち明けた」。

イエス様のみもとに来て、何事かを信仰によってなそうとする者は、もはやどのような不安をも持つ必要はありません。イエス様はこの女に対して「娘よ」と言われました。「娘よ」と語られたことは、イエス様がこの女に対して真心からの愛を持っておられたということの証しです。

復活なさったイエス様に出会った女性たち、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤとサロメは、復活の朝、急いで墓に行きました。マルコ伝16章を見ると次のように書かれています。

マルコの福音書 16章5節

それで、墓の中にはいったところ、真白な長い衣をまとった青年が右側にすわっているのが見えた。彼女たちは驚いた。

8節

女たちは、墓を出て、そこから逃げ去った。すっかり震え上がって、気も転倒していたからである。そしてだれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

この青年は、「イエス様はよみがえられた」と語りました。しかし、女たちは恐ろしく思い、不安に陥ったのです。しかし、このような不安も全く無意味なことでした。イエス様がよみがえられたということは、決して恐るべきことではなく、かえって大きな喜びであるからです。

バプテスマのヨハネの父親ザカリヤについて、似ていることばが書かれています。ルカ伝1章です。このザカリヤは何年間も、子どもが与えられるよう祈り求めました。しかし、主の御使いが彼に現われて、彼に男の子が与えられるということを告げた時、彼は不安を覚えた、恐怖に襲われたとあります。

ルカの福音書 1章11節、12節

ところが、主の使いが彼に現われて、香壇の右に立った。これを見たザカリヤは不安を覚え、恐怖に襲われたが、

と書かれています。

前に考えたように、ヨセフの兄たちの不安と恐れも全く根拠のないことでした。彼らのこの不安は、ヨセフに対する疑いの念からきたことでした。創世記にもう一度戻りましょう。

創世記 50章18節から21節

彼の兄弟たちも来て、彼の前にひれ伏して言った。「私たちはあなたの奴隷です。」ヨセフは彼らに言った。「恐れることはありません。どうして、私が神の代わりでしょうか。あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。ですから、もう恐れることはありません。私は、あなたがたや、あなたがたの子どもたちを養いましょう。」こうして彼は彼らを慰め、優しく語りかけた。

恐怖、不安、不信頼は、不信仰の表われであるばかりでなく、全く馬鹿げたことです。弟子たちがその不信仰によって不安に陥ったことは、全く悲しむべき事からでした。もしそうでなければ、神の御子が溺れ死ぬということはありません。このような弟子たちの考え方は笑い話であると言わざるを得ないのではないのでしょうか。

不信仰とは、目に見える現実を目を奪われて、イエス様のことを忘れてしまうことです。それと反対に信仰とは、目に見える現象の背後におられるイエス様に目を留めることです。すなわち、目に見えるものから目を離して、イエス様だけを仰ぎ見ることです。

信仰に立つ人は、苦難や困難に直面したとき、悲しまずに喜びます。なぜならそれらの苦難や困難を通して、私たちは主をよりよく知ることができるようになるからです。もし弟子たちがこのときイエス様に目を留めさえすれば、彼らは不安から解放され、たましいの平安を得たでしょう。なぜなら、そこにはイエス様が彼らとともにおられたからです。彼らはその不信仰のゆえに不安になり狼狽して、イエス様を眠りから揺り起こしたのです。

イエス様とはどのようなお方なのでしょうか。ヘブル書4章15節を読んでみましょう。
ヘブル人への手紙 4章15節

私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。

と記されています。

イエス様は人間であられましたから、お働きになった後、私たちと全く同じようにお疲れになりました。イエス様は弟子たちと同じように嵐の中にあり、波の間に間に揺れ動く舟の中におられました。海を造られた主、また風をお静めになる力を持っておられる主は、木の葉のように波にもてあそばれる小舟の中で眠っておられました。ここに、イエス様が人間として持っておられたご性質を見ることができます。

弟子たちは不信仰から、イエス様を揺り動かして起こしました。弟子たちは、イエス様に次のように尋ねました。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われませんか」。弟子たちはこの言葉の中に、イエス様は私たちのことを思っておられないのではないかと、私たちはどうなってもかまわないのかという気持ちを明らかにしています。弟子たちはこのとき、イエス様の持っておられる「全能のみ力」と「愛」とを完全に忘れてしまったのです。

「何とも思われませんか」。このような態度を、私たちはしばしば日常生活の中でとったり、心の中でこのようにつぶやいたりすることがないでしょうか。

例えば、私たちは病気で長い間ベッドに横たわっているとします。そのような時に、主が直ちにこの病を癒してくださる力を持っておいでになることをもちろん確信していますが、主はなぜなかなか働こうとなさらないのかと思います。経済的に行き詰まって、財布の中身もいつでも空っぽだとします。そのような時に、主は富んでおられる方なのにどうして私たちに必要なものをもっとお与えにならないのか、とつぶやくようなことがないとは言えないでしょう。私たちがたびたび困難に突き当たってどうしようもないような状態に遭遇すると、私たちはしばしば、「主よ。あなたは私をお忘れになったのではないのでしょうか」というようにつぶやきがちな者です。

このようなことは、私たちの上に限りない愛を注いでおられる主のみこころを、いかに深く悲しませることでしょう。このような不信仰な態度は、本当に馬鹿げたことです。

イエス様は、天にあるご自分の富をお捨てになって地に降りて来てくださり、私たちのためにご自分のいのちをお捨てになりました。このようなイエス様が、どうして私たちのことをお忘れになるようなことがあるでしょう。絶対にあり得ません。

ペテロは、当時いろいろなことで悩んでいる人々を励まそうと思って書いたのです。

ペテロの手紙・第一 1章6節、7節

そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいますが。いまは、しばらくの間、さまざまな試練の中で、悲しまなければならぬのですが、信仰の試練は、火を通して精錬されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。

さまざまな試練は金よりも尊いものです。なぜなら、それらの試練を通して、私たちは主をより深く知ることができ、イエス様の素晴らしさを更に体験することができるようになるからです。

弟子たちは、弱り果てて不信仰に陥り、失敗しました。私たちは自分がある問題に遭遇すると、その一つの問題のために、今まで受けた多くの恵みをすっかり忘れてしまうものです。不信仰は主の力と助けを忘れさせます。弟子たちは、「私たちは滅びる」と思い込んでしまったのです。

もちろん弟子たちだけではなく、多くの人々も同じことを経験しました。例えばダビデも、同じように不信仰に陥ってしまったことがあります。サムエル記上27章を見ると、次のように書かれています。

サムエル記・第一 27章1節

ダビデは心の中で言った。「私はいつか、いまに、サウルの手によって滅ぼされるだろう。ペリシテ人の地にのがれるよりほかに道はない。そうすれば、サウルは、私をイスラエルの領土内で、くまなく捜すのをあきらめるであろう。こうして私は彼の手からのがれよう。」

もちろん、これも不信仰の現われにすぎなかったのです。この後すぐに、サウルは自殺し、当のダビデはサウルの代わりに王座につきました。

あの大胆なエリヤという預言者も、いろいろな辛いことを経験しました。当時の王の妻であるイゼベルから逃げてしまったのです。彼女は確かにエリヤを殺そうとしました。しかし逆になったのです。主はこのイゼベルのほうを残酷な死に方で滅ぼされました。列王記下の9章に、この彼女の死に方について書き記されています。

列王記・第二 9章33節

彼が、「その女を突き落とせ。」と言うと、彼らは彼女を突き落としました。それで彼女の血は壁や馬にはねかかった。エフーは彼女を踏みつけた。

35節から37節

彼らが彼女を葬りに行ってみると、彼女の頭蓋骨と両足と両方の手首しか残っていませんでした。帰って来て、エファーにこのことを知らせた。すると、エファーは言った。「これは、主がそのしもベティシュベ人エリヤによって語られたことばのとおりだ。『イズレエルの地所で犬どもがイゼベルの肉を食らい、イゼベルの死体は、イズレエルの地所で畑の上にまかれた肥やしのようになり、だれも、これがイゼベルだと言えなくなる。』」

ひどい死に方です。彼女が殺そうと思ったエリヤは、死なず、火の馬車に乗って天に挙げられたのです。

弟子たちは滅びることはありませんでした。風と波はそれらをお造りになった主であられるイエス様のひと言葉によって静められたのです。

マルコの福音書 4章39節

イエスは起き上がって、風をしっかりとつけ、湖に「黙れ、静まれ。」と言われた。すると風はやみ、大なぎになった。

ここから、私たちは二つのことを読み取ることができます。それは、

第一に、主の恵み。

第二に、主の全能の力ということです。

イエス様の恵みとは、イエス様が弟子たちによって揺り起こされたにもかかわらず、弟子たちに対して怒りを示されずに、その代わり風と波をしかられたことです。このことは、「私たちのことを何とも思われないのですか」という弟子たちの問いに対する主のお答えでした。

イエス様は人間でしたからお疲れになりました。眠っておられ、風の波間に揺れる舟の中におられました。しかしイエス様は同時に神であられましたから、起き上がって風と波に命じられました。イエス様が目をさまされたのは、弟子たちとともに舟の中の水をかき出したり、弟子たちの助けをするためではなかったのです。弟子たちが、たとえイエス様と同じように風と波に対して命令したとしても、或いは当時の最高の権力者であったローマ皇帝がそのように命じても、風と波がおさまることは決してなかったでしょう。しかし、イエス様はそれをなさいました。なさいたとき、風と波はイエス様のみことばに従ったのです。

ちょうどこれと同じように、イエス様は私たちの心の中にある波風をも静めることができになるお方です。私たちはもっともっとイエス様に対して信頼しようではありませんか。私たちはイエス様に信頼する特権があります。もし、私たちがイエス様に対して信頼をおかなければ、私たちの失うものの大きさはことばで言い表わすことが出来ません。

しかし、私たちはイエス様を信頼せずに、自分自身のことに没頭してしまうことが往々にしてあります。私たちに問題があるとき、私たちはその問題を通して、主に対して不信頼ではなく信頼を持たなければなりません。私たちがたとえ心配したところで、自分の髪の毛一筋をも自分の思いどおりにすることはできません。しかし、イエス様はいつでも私たちのことを間違いなく心配してくださるのです。たとえ私たちが目で主を今は見ていないとしても、また感情でそれを捉えることができないとしても、主はいつでも私たちとともにおられ、私たちと一つになっておられるのです。ですから、私たちをお見捨てになるということは決してありません。

ヘブル人への手紙 13章。すばらしい約束です。13章5節の後半から読みます。

ヘブル人への手紙 13章5節後半、6節

「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましょう。」

「決して」は、決してです。

イエス様は彼らに言われました。「どうしてそんなにこわがるのですか。信仰がないのはどうしたことですか」と。イエス様は弟子たちに向かってはっきりと、「信仰がない」と言われ、「あなたがたはわたしがだれであるかを忘れてしまっている」とおっしゃいました。

イエス様のみ力について、福音書の中に七つの面が書き記されています。

一番目、自然界の力に対する支配力。

二番目、病人を癒す力。

三番目、一度に何千人にも食事を与える力。

四番目、悪霊を追い出す力。

五番目、罪を赦す力。

六番目、十字架から下りる力。

七番目、死者をよみがえらせ、また、ご自分の死を克服する力。

これらの七つの事がらを、聖書、福音書はイエス様のお持ちになっていた力として書き記しています。イエス様はすべてのものを支配しておられるお方です。

パウロは、エペソにいる兄弟姉妹に次のように書いたのです。

エペソ人への手紙 1章22節

また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。

またペテロは書きました。

ペテロの手紙・第一 3章22節

キリストは天に上り、御使いたち、および、もろもろの権威と権力を従えて、神の右の座におられます。

弟子たちは困難に直面したときに、イエス様を信じる者であったにもかかわらず、信仰を失ってしまいました。つまり苦難に直面したとき、主ご自身に信頼することができなかったのです。彼らはそのとき、まるで信仰を持たない者のように行動しました。このことは私たち自身に対する警告でもあります。

へブル人への手紙 3章12節

兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。

この箇所によると、主に信頼しないということは、「生ける神から離れる」ということを意味していることがわかります。

へブル人への手紙 4章11節

ですから、私たちは、この安息にはいるよう力を尽くして努め、あの不従順の例にならって落後する者が、ひとりもないようにしようではありませんか。

弟子たちが溺れ死ぬということは、あり得ないことでした。なぜなら、イエス様がともに舟の中におられたからです。同様に、私たちもまた滅ぼされるということはありません。なぜなら、イエス様が私たちの内に住んでおられるからです。イエス様に対して大きな信頼を持ちたいものです。そして、私たちはもっと大胆に主の力を自分の力としようではないでしょうか。

弟子たちが新たに主の力と愛とを体験したときに、彼らは喜びをもって主を礼拝したのではなく、「恐怖に包まれた」とあります。「主に対する生きた信仰」があるところには、常に礼拝の思いがあります。しかし不信仰の思いがあるところには、常に恐怖が伴います。

マルコの福音書 4章41節

彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った。「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」

私たちも同様に、イエス様ご自身を更に深く知り、その力と愛とを更に深く知るべきなのではないでしょうか。

了